

画期的な研究成果

日本国際問題研究所中国部会編

中国共産党史資料集

全12巻

(既刊1-4)

近年 中国共産党史の研究

は、国際的にも著しく進展しつつある。そのなかで、中国共産党史は、昨年、創立五十周年を迎えたが、この党が一貫して激動の諸局面に身をさらしつつ今日にいたっていることのために、中国共産党史に関する第一次的な資料の蒐集は、またきわめて困難な作業であるといえよう。それだけにこの仕事は、外部世界において是非とも実現せねばならないことであるともいえるが、その点で、わが国の中国学界は国際的責任を負っているといえるのかも知れない。同じくのように、わが国ではかつて、渡辺野駱一氏の努力によって、中国共産党史の資料集がなされた。それは、まさに称賛すべき功績であったが、その体系的・完全性という点では、当時の条件からして、また氏個人の努力に負っていたという点からして、不十分なものがあった。

ここに出現したのが、日本国際問題研究所中国部会に拠った研究集団(衛藤瀧吉、藤井野三、宇野重昭、山極晃氏らをはじめさらに数名の若手研究者)によってなされた本資料集である。本資料集は、また四巻まで刊行されたばかりであり、今日続刊中であるが、外務省の協力援助に

よっておよそ十年の歳月を要して広く国内外から集められた膨大な資料は、ほぼ五四運動前後から一九四五年までの期間を網羅し、そのうちの基本資料を徹底採録したうえ、資料目録、年表、主要文献一覧表、索引を付してここに刊行されたのである。これほどの作業は、中国を含む諸外国においてもこれまで

に例がなく、研究分野における画期的な作業として歴史的・国際的意義をもちものであるといっても誇張ではない。関係者の評を要する。今後、本資料集が完結した際には、研究者の便宜という点もより、中国共産党史研究の進展ひいては現代中国研究の発展に、大いに寄与することはいうまでもなからう。

要は、いかにして資料を話かせるか、ということにあるといえる。もとより、編集者は、それなりの方針があるのだが、いくつかの点で要諦の言を弄するならば、次の点を率直に指摘したい。まず第一に、これだけの資料を集め、さらに演出するという作業であるがゆえに、中国語原文で刊行(もしくはこれを併配)したのであることである。なぜなら、本資料集は、やはり専門研究者(もしくはそれを志向する者)に第一義的に必要なるものであるだけに、その多くは原文が読めるはずであるし、こうすることによってアメリカ、西欧、ソ連などの研究者にまで受け開かれるからであり、そのこ

とを諸外国の研究者は切望しているところからである。第二には、毛沢東をはじめ中国共産党の重要人物の論文や文壇一般の目につれにくいものについて、それらをもっと多く収録してほしかった。たとえば、第一巻においては、彭述之「中国国民党の指導者は誰か?」というような意味深い資料も収録されているのだが、それならば、述之がこの論文を書くことになった背景の一つでもある毛沢東の論文「北京政変と蔣介石」(『瀟湘』第八九期)は、よりついでに毛沢東研究の必要性という意味から是非載せてほしかった。第三に、私は過般ノ連科が訪れたが、中共六大会(モスクワ)前後の資料や「留ソ派」幹部の論文などで興味深いものが多々あった。これらに新資料については、今後さらに蒐集を続け、補ってほしいと思う。ともかく、本資料集の一日も早い完結を待望するところである。(動筆書房・各岡、〇〇〇)

の人が予習や予備知識の必要な哲学、科学の本を、小説と同じように読もうとする愚かさについて論じている。



ゲート

ゲーテ(1749年8月28日 - 1832年3月22日)の全著作からアフォリズムを採んで編んだ「ゲート格言集」

第三部の「二八三〇年一月五日」に記録されていることは、このことばもゲーテがソレに語ったもの。ソレが彼の大叔父に

いたヌモに基づく部分があり、このことばもゲーテがソレに語ったもの。ソレが彼の大叔父に

の人が予習や予備知識の必要な哲学、科学の本を、小説と同じように読もうとする愚かさについて論じている。

「高橋健一訳、新潮文庫」に収められている「芸術と文学について」の名言の一つ。エッセイ「ヴァイマル公園公の教育」で、対話は読書のむすかしに

「ゲートとの対話」第三部

「ゲートとの対話」第三部

「ゲートとの対話」第三部